

中上級日本語学習者の聴解におけるメモ分析

An analysis of notes taken during listening exercises by intermediate and advanced Japanese learners

藤 井 みゆき
FUJII Miyuki

古 田 朋 子
FURUTA Tomoko

キーワード

〔中上級日本語学習者〕 Intermediate and Advanced Japanese Learners

〔聴解〕 Listening Exercises ・ 〔メモ〕 Notes Taken ・ 〔誤用〕 Errors

〔ストラテジー〕 Strategies

I. はじめに

人との対話、テレビ・DVD・映画の視聴や車内放送など、我々は、あらゆる場面で音声言語を耳にしている。たとえ、それらを聞いている最中に雑音が入り、単語や文末が聞きとれなかった状況下においても、話されている場面、前後の語彙や文脈からその部分を推測し、全体の意味を把握しようとする。それは、専門家の話や政治の討論会などで、今まで耳にしたことがない未知語を聞いた時も同様で、前後の語彙や文脈から、その語の意味を推測する。また、話を聞きながら、一旦予測した意味を修正することもある。つまり、モニターをしながら聞いているのである。意味がわからなければ、誰かに質問をしたり、聞きとった音を即座に平仮名や予測した漢字でメモし、辞書で調べたりすることもあるだろう。

人間の記憶には限界があるので、その場で聞いたことを長時間覚えておくことは不可能に近い。したがって、聞いた言葉や内容を忘れないように覚え書きとしてメモを残す。例えば、講演などを聞く場合には、次々に耳に入ってくる情報をすべて書き留めておくのではなく、目的に応じて取捨選択し、不必要な情報は聞き流したり、次の情報や話の流れを予測したりしながら聞いている。したがって、そのメモには、話を構成する上で不可欠なキーワードが書き留められ、それらを総合的に見ることで、話全体の流れや、時には話し手の意図も読み取れるものである必要がある。そのため、情報の取捨選択や全体を把握しながらメモがとれることは、日本語母語話者だけでなく、学習者の聴解における有効な方策でもある。横山（2008 P.13）は、「聴解とは、言語知識を活用し、また文脈・場面や背景知識を手がかりにして、音声から意味を構築する過程」と定義している。したがって、聴解の過程で方策が有効に使えることは、日

本語学習者にとっても有益なことである。

筆者らは龍谷大学留学生別科において、聴解の授業を担当した。受講生の日本語学習者にとって、大学の講義、日常的に耳にする日本人母語話者の会話、テレビなどには専門用語や未知語が多く含まれている。その上、複合語や句、節、文の切れ目の判断や専門用語、外来語の聞きとりが難しい。その状況のなかで、重要な語をメモしたり、講義の要約をしたりする力が必要とされる。そこで、本稿では、彼らにとって未知語が含まれるニュース教材を選び、場面や背景知識、文脈から内容を理解する際の学習者のメモに注目し、その分析と考察を行うものとする。また、その結果から、学習者が効果的なメモがとれるようになるために、聴解の授業においてどのような学習指導を行えばよいのかを考える。

Ⅱ．先行研究と本研究の目的

ここでは、日本語学習者への聴解に関する指導法、学習者の聴解ストラテジー、及びメモに関する先行研究について述べる。

まず、指導法に関する先行研究として、効果的な方法を扱った遠藤（1987）は、非日本語母語話者で日本の大学1年生に、テレビニュースの中の特集を取り上げたビデオ教材を視聴させ、学習者がニュースを見て、自分でノートが取れるようになるように、教材を仕上げていくタスクを与えている。しかし、これらのタスクは、大学の講義や演習の聞きとりが行えるようにするのが目的であるが、最初に語彙を提示するというボトムアップの授業形式で、話の先を予測する力やニュースの中に出てくる未知語を推測する訓練になっているとは言い難い。また、指導法によって、学習者の理解度がどのように進んでいるのかの過程については触れていない。

宮城（1998）は、初級段階で音声を正確に聞きとる「耳」を作り、音声言語としての日本語の特徴を理解し、習得した知識を応用して聞きとる情報処理能力とストラテジーを適切に使う力を養うことが大切だとし、ストラテジーの訓練の必要性について言及している。日本語学習者が聞きとりの際に使用するストラテジーについて水田（1996）は、日本語母語話者と中国人日本語学習者に日本人向けの講演テープを編集したものを聞かせ、聞きとり過程で生じた問題処理のストラテジーと問題処理に使われたストラテジーの連鎖について分析している。それによると、問題が生じた時に、学習者には自己モニターや聞き流しというストラテジーが使われにくいとしている。また、尹（2001）は、中国の大学で日本語を学ぶ日本語学習者が教室の内外でどのような聴解ストラテジーを使用しているのかについて、質問紙調査を行っている。その結果、教室内での聴解に関しては補償ストラテジー、認知ストラテジー、メタ認知ストラテジーが上位を占めていた。また、ストラテジーと聴解力との関係については、認知ストラテジーや補償ストラテジーを使用する学生は聴解の成績がよく、この2つのストラテジーには相関関係があるとしている。しかし、尹自身も指摘しているように、データの妥当性と信頼性の問題があり、学生への質問紙だけの判断では不十分ではないかと思われる。

播岡（2010）は学習者が音声のみのテレビニュースを聞いてとったメモを観察し、1. 誤聴傾向、2. ニュースのリード文の有無と情報量の関係、3. 処理能力の問題による誤答、4. テキストの難易度、5. スクリプトの扱いの5項目の分析を行っている。しかし、学習者が書いたメモの特徴は考察されているが、学習者がどのようにメモをとっているのかというストラ

テジーについての分析や、タスクシートの問題の正答率とメモとの関係は明らかにされていない。また、タスクシート問題の正答率の高い学習者と低い学習者のメモの違いも明らかにされていない。

山崎（2007）は、聴解作文の授業にあたり、語彙リストの配布とともにメモの指導を行ったところ、「全員がほぼ要点を捉えたノートをとることができるようになった。」と報告している。

これらの先行研究を踏まえ、本稿では日本語学習者のメモにおける誤用分析のみでなく、ニュースの聞きとり後に行った質問内容の成績が良い学生と得点に結びついていない学生とのメモの相違点やメモから観察できる学習者のストラテジーについても論じ考察したことを聴解の授業で活用する方法を提示する。

Ⅲ. 聴解の授業の実際と分析対象のメモ

1. 学習者と授業内容

筆者らが担当した、2010年度後期の5クラス聴解の授業では、各活動を通して受講生が総合的な聴解力を伸ばすこと、及び発表などのアカデミックなひとまとまりの話を聞き、概要が理解できるようになることを目標とした。クラスには、私費による大学及び大学院入学を目標として学習する別科生と交換留学生在が混在していたため、授業では、ニュースの聞きとり、ディクテーション、シャドーイング、日本語能力試験や日本留学試験の問題解答、発表の聞きとり、映画やドラマの視聴等を行い、様々な教材を扱った。各活動では、語彙・表現の拡大を目指す一方で、与えられた情報から必要な情報を聞きとる練習、実用的な短い会話を細部まで正確に聞きとる練習、会話の聞きとりと再生を行う練習、大学での研究活動に関わる難解な語彙を含む談話の内容理解の確認、ナチュラルスピードの口語表現特有の表現を含む発話の聞きとり練習等を行った。

受講生は27名で、授業の初日に実施した聴解テストの結果により、レベル別にクラスを①と②の2つに分けた。学習者の日本語の水準は、主に日本語能力試験1～2級レベルで、①クラスの学生の国籍は中国10名、アメリカ1名、オーストラリア1名、シンガポール1名、韓国1名、台湾1名、タイ2名の17名、②クラスは中国6名、ドイツ1名、シンガポール1名、デンマーク1名、ウクライナ1名の10名である。日本語の習熟度は、全体的に①クラスのほうが高い。

メモをとる練習は、『聴解・発表ワークブック』の「メモをとる練習」(PP.2-8)を参考に教材を作成した。そして、初回と2回目の授業で練習と解説を合計40分ほどを行った。教材は、「重要な言葉を中心に短く」「変化、疑問、継続、希望などを表す文で、後ろに続く言葉が予測可能な場合はその言葉を書かない」「形容詞や動詞などを漢字や熟語で表す」「記号・略語」等の項目を含む内容のものであった。

2. 分析対象としたメモ

今回、メモをとるための練習に用いた『ニュースで学ぶ日本語パートⅡ』は、中級以上の日

本語学習者を対象にしたニュース教材で、学習者が音声情報の取捨選択をし、必要な情報を正確に捉えられるようになることを目的としている。扱われているニュースは全体で50あり、自然、事故事件、教育関係、生活、社会、社会経済、政治、医学、スポーツなど多岐に渡っている。課を追うごとに、未習語にとらわれずその意味を推測する力、ニュース独特の表現や情報の並べ方のパターンに慣れ、ニュースでよく耳にする語や表現を増やすだけでなく、日本の社会に関する知識を増やし、日本語学習者にとって難しい複合語などの分節化が可能になるよう構成されている。

50種類のニュースの中から、学生が身近に感じ、興味を持つと推測される10のニュースを抜粋し、テキストをもとに加工したプリントを作成し授業で使用した。(参考資料1)

学習の流れは、トピックを導入してスキーマを活性化させた後、学習者がテープを聞きながらメモを取り、そのメモをもとに内容に関する質問に解答し、再度テープを聞き要約を行った後で、ニュースに出現した語彙のディクテーションを行うというものであった。本研究では、その中で、学習者がテープを聞きながらとったメモを主な分析対象とする。

表1は、ニュース内容と各クラスのメモのタスクシート数をまとめたもので、学習者が今回分析の対象とする3つのニュースを聞いた日、各ニュースの内容、2つのクラスで回収したメモのタスクシート数を示している。ニュースの前の番号は、『ニュースで学ぶ日本語パートⅡ』で記されたニュースの番号である。

表1 ニュース内容と各クラスのメモのタスクシート数

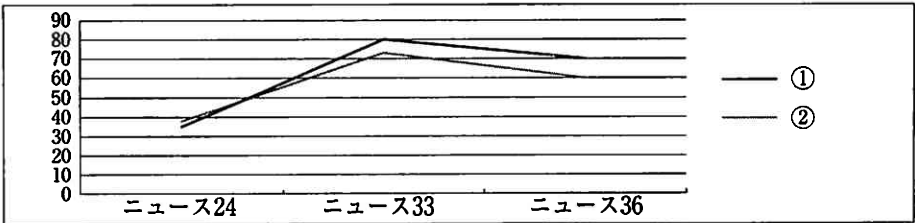
実施日	ニュース	①クラス	②クラス
11. 17	24「大学生の生活費」	12	8
11. 24	33「社宅」	17	10
12. 1	36「派遣社員」	14	10

本研究の分析は、以上の2つのクラスの合計71枚のタスクシートを用いて行った。

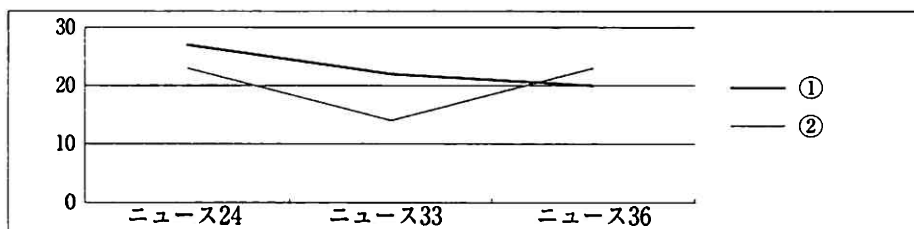
Ⅳ. 考察

本章では、Ⅲで述べた3つのニュースのメモを分析する。

まず、具体的な分析の前に、メモをとった後で解答する、ニュースの内容質問の解答における2クラス間の得点差について触れる。グラフ1は、①②クラスの得点（平均点）の比較で、グラフ2はその標準偏差である。



グラフ1 ①②クラスの得点（平均点）の比較



グラフ 2 ①②クラスの得点（標準偏差）の比較

グラフ 1 の 2 つのクラスの平均点の差は、ニュース 33 と 36 で 10 点である。そして、グラフ 2 の標準偏差では、②クラスは回数を追うごとに学習者間の得点のばらつきが小さくなってきている。3 つのニュースを扱った期間は 2 週間なので、その間に習熟度が低い学習者の聴解力が急速に向上したとは単純には言えない。このクラスの授業参加者が、とったメモの内容を解答に活かすことに慣れてきた結果、彼らの内容質問の得点の高低差が縮小されたのではないだろうか。

1. メモにおける出現単語数

表 2 は、メモにおける出現単語数の平均、つまり、各ニュースの 1 人あたりのメモに現れた単語数（少数点第 2 位四捨五入）をクラス別に示したものである。数え方は、メモに記入された各語及び記号を 1 つ 1 語とカウントした。ただし、「人」、「円」、「%」等の数字の後に続く単位を表す語は、単独では意味をなさないか異なる意味を表すため、前に位置する数字と合わせて 1 語とした。たとえば、「28」は 1 語、「28%」も 1 語と数えた。

表を見ると、どのニュースにおいても①クラスの方がメモした単語数が多いことがわかる。聞きとりの力がある学習者が必ずしもメモの量が多いとは限らず、また、メモでの単語数が多いからといって必ずしも内容質問の解答の得点が高いとはいえないが、①クラスと②クラスは能力別のクラスであることから、学習者の聴解力とメモの量は全く無関係とは言えないのではないだろうか。

表 2 メモにおける出現単語数（平均）

ニュース	①クラス	②クラス
N24	16.5語	12.6語
N33	13.4語	9.7語
N36	16.2語	11.4語

2. メモの誤用分析

播岡（前掲）は、メモに現れた表記の誤りを「誤聴傾向」と呼んでいるが、厳密にいうと、この誤用は聞きとりのみでなく、メモをとる段階での誤りも含むことが推測できるので、本研究ではニュースの内容と一致しないメモの内容を「誤用」と呼ぶことにする。

誤用分析にあたり、まず、播岡（前掲）の分類を参考に誤用を下記のとおりに3つに分けた。

- (1) 音素・音変化によるもの
- (2) 意味のすりかえによるもの
- (3) 処理能力の問題によるもの

上記の3つの誤用は、今回のメモからも抽出され、他に、数字自体の誤用も見られた。以下に、それらの誤用の例を挙げながら論じる。なお、データの内容を示す例のNはニュースの種類を、①と②はクラスを、Sは学習者、それに続く数字は学生番号を表す。

(1) 音素・音変化によるもの

誤用全体の中で、この音素・音変化によるものが最も多く見られた。それをさらに以下の4つに下位分類した。()内は正しい表記である。

i. 清音と濁音・判濁音の取り違い

今回のメモでは、この誤用は、中国とタイの学習者に見られた。誤用の要因は、母語の音韻体系とも関連がある可能性が高い。

例 N24①S1 パイト (バイト)、N24①S3 こらく (ごらく)、N36①S6 たんせい (だんせい)

ii. 特殊音節の脱落・不要な音の追加

この誤用では、長音及び促音の脱落、撥音の追加が見られた。最も多かったのは長音の脱落で、中国及び韓国の学習者のメモで観察された。今回のデータには他の国籍の学習者のメモには現れなかったが、一般的に広く見られる誤用である。これらは、初級の学習項目として、しばしば取り上げられるが、中上級の学習者でもなかなか習得が進まないことが確認された。

例 N36①S6 だんせ (だんせい)、N36②S10 よほう (ようほう)

次の例では、語頭の「だ」と「た」を取り違える濁音の誤用も含まれているが、後続する促音も脱落している。

例 N36②S10 出している (たっしている)

次の例には、不要な撥音が追加されている。学習者が「学費」という単語の意味が即時に捉えられず、認識したとおりの音声を綴ったものであろう。

例 N24①S9 がくひん (がくひ)

iii. 音素の取り違い

今回のメモより観察されたのは、「し」と「ち」の子音、shとchの音素の取り違いだが、タイ語を母語とする同一人物から2つ見られたことから、タイ人学習者の母語の干渉ではないか

と思われる。

例 N33①S6 やしん (やちん)、しんたい (ちんたい)

iv. その他

次の語は、i～iii以外の、不要な音素や音節の追加、及び取り違えの誤用である。最後の2例は、それぞれ長音の追加、長音の追加と脱落の誤用も含んでいる。これらは、書いた人が未知語として認識し音を聞きとったまま記したのか、捉えた音を誤って表記した語なのか定かではない。

例 N33①S10 もちいれ (もちいえ)、N33①S5 かいしゃいんぎ (かいしゃいん)、
N33①S10 にゆうじゅうりつ (にゆうきよりつ)、N33①S17 きょうゆ (しょゆ)

(2) 意味のすりかえによるもの

次の例であげるものは、正しくは「交際費」だが、メモには「交通費」とある。このように、発音が類似している単語を他の語と誤って認識する誤用が幾つか観察された。すりかえられた語がキーワードや内容質問に関係しているかどうかでその重要性は異なるが、1語の意味の取り違えが文全体、あるいは談話全体の意味の把握に影響を及ぼすこともある。

例 N24①S7 交通費 (交際費)

(3) 処理能力の問題によるもの

例のメモにある「住宅ローン増」は、「住宅ローンの金利の安さなど」から「持ち家の希望者が増えていますが」のうち、聞きとれた、あるいは、書きとれた単語を結合させた結果、文全体の意味が変わってしまっている。音声聞きとってメモを記す間の過程では、短時間の間に音声処理と意味処理が行われるが、その際に情報の関係性がうまく処理されずにこのような誤用に結び付いたのではないだろうか。

例 N33②S5 住宅ローン増

上記の3つの誤用の他に、数字について、(2) 意味のすりかえや (3) 処理能力の問題に関わるものを除いた数字自体の誤用として、正解と全く異なる数を記入する、端数を省略する、桁違いの数を記録する等の誤りが見られた。正解と異なる数をメモした学習者は①クラスに多かったが、元々②クラスはメモの量全体が少なく、さらに数字自体の記入が①と比較して少なかった。彼らが大きな桁の数字を聞きとれなかったのか、時間的にメモをとる余裕がなかったのか、次々と流れてくる音声を処理するために、メモより聞くことに集中したのかはわからないが、両クラスの学習者にとって桁が大きい数字の書きとりは難解なものであることがわかる。

以上、今回のメモにおける誤用には、音素・音変化によるものが最も多く、その他に、意味

のすりかえによるもの、処理能力の問題によるもの、数字に関するものがあることがわかった。

3. メモにおけるキーワードのカバー率

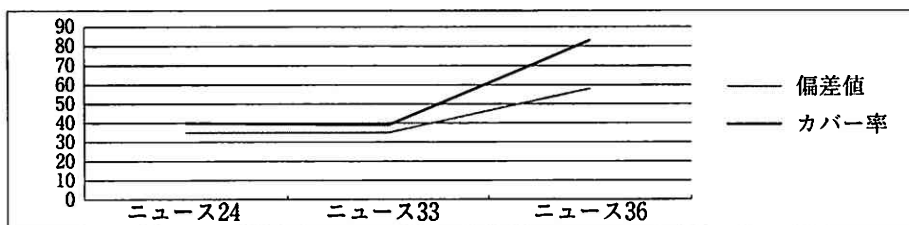
個々の学習者のメモ内容には相違点が見られるが、ニュースの中のキーワードが聞きとれて、それがメモとして残っているか否かは内容質問の正答率を大きく左右する。ここでは、クラス①の中で成績が伸びた①S1と、メモの量はあるのに成績が伸びない①S3を比較し、それぞれの学習者のメモは、キーワードとして記載される必要のある語をどの程度含んでいるのか、そして、それはクラス全体の中での成績の伸びとどのように関係しているのかを考察する。ここでのキーワードは、それぞれのニュースの中で重要となる語、及びメモをとった後の内容質問に解答するために必要な言葉とする。なお、成績は素点ではなく、効率のよいメモと成績の伸びとの関連性を示すため、クラスの中での位置を示す偏差値を用いた。

グラフ3は①S1のメモの中のキーワードのカバー率の割合と偏差値の推移を表している。このグラフから、メモの中のキーワードが含まれる割合が大きくなれば、それに伴いクラスの中での成績も上がっていることがわかる。

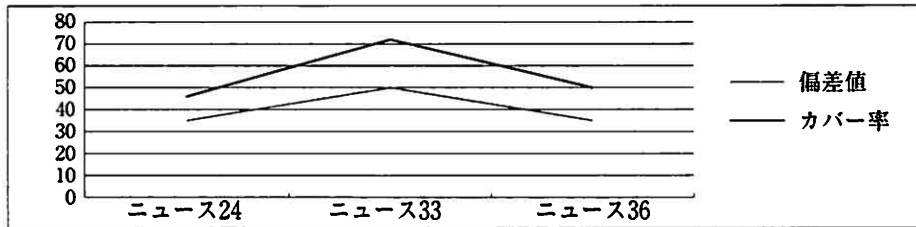
まず、①S1がそれぞれのニュースを聞いた際にとったメモの変化（参考資料2）を観察する。1回目、N24のメモでは、カタカナ表記や音の取り違いによる誤用がみられ、音を正しく聞きとる力が不足していることが伺える。また、キーワードのうち、メモにあるのは1つのみで40%しか書きとられていない。ニュースの内容把握に関する正誤問題も不正解であったことから、ニュースの中の必要な情報の聞きとりだけでなく、話の全体をつかむ力も劣っていることがわかる。偏差値は35で、クラスの中でも下位の成績である。

2回目のN33では、メモのとり方に工夫が見られ、それぞれの数字の相互関係を示した系統立てられたメモが観察される。しかし、キーワードとなる数字の記録はほとんどなく、キーワードとなる語も前回のN24と大差なく39%しか記録されておらず、偏差値も35である。

3回目のN36にもN33のメモに見られたような数字や語の書き方に工夫がみられ、さらに記号を使って語と語との関係性を表している。ここでは、83%のキーワードが観察され、ニュースの内容把握に関する正誤問題は全問正解だった。偏差値は58で、クラス全体の平均よりやや上の成績である。以上の結果から、①S1は質問の正答に結びつくキーワードの聞きとりだけでなく、話の全体をつかむ力も備わってきたため、成績が伸びたのではないかと推測される。キーワードが書き留められるということと、内容把握ができるということは、独立したものではない。情報の取捨選択ができるということは、情報をより分けながら聞けるということである。特にニュースには要約となるリード部分あり、そこで要点が述べられるという形式をとるものが多く、そのパターンに慣れてきたということも考えられる。



グラフ3 ①S1のメモの中のキーワードカバー率と偏差値の推移



グラフ 4 ①S3のメモにおけるキーワードカバー率と偏差値の推移

続いて、メモとして、ある程度記録されているのに成績が伸び悩んでいる①S3のメモについて述べる。

グラフ 4 は、①S3のメモのキーワードカバー率と偏差値の推移を表している。①S1と同様、それぞれのニュースについてのメモに見られた特徴を分析し考察する。

1回目のN24では、数字の聞きとりができていない。メモに残っているキーワードは必要とされるものの46%があり、偏差値は35でクラスでは下位層に属している。しかし、要点の一つである大学生の生活費が減った要因は書き留められている。

2回目のN33では、数字は聞きとれているが、数字と数字の関連性は理解できず、ただ聞きとれた数字を羅列しているだけという印象を受ける。キーワードカバー率は71%、偏差値は50である。キーワードとなる語が71%書き留められているにも関わらず偏差値が50というのは、N33はクラスで全体的によくできており、素点のクラス平均が80だったことによる。

3回目のN36では、N33のメモと同様、数字は記述されているが、それぞれの関係性は記録されていない。メモにおいてキーワードが含まれる割合は50%である。この①S3の例からも、キーワードが書きとられている割合が高ければ、内容質問に答えられる確率も高くなり、その結果、得点も高くなると考えられる。しかし、この例では、3回ともニュースの全容を問う正誤問題には不正解である。数字は聞きとれるが、その関係性を聞きとることができず、ニュースの全容をつかむ力も劣っていると推察される。

本章の1. メモにおける出現単語数のところで述べたように、メモの量と理解度はある程度比例するが、キーワードとして必要な語がどれだけメモに含まれているか、つまりメモの質が大きく関係していることがわかる。耳に入ったものを、ただ書きとるのではなく情報を選別して、必要なものだけをメモとして残すことができるかが、聴解力の差として現れてくるのではないだろうか。

4. メモで観察されたストラテジー

オックスフォード (1994) では、「メモをとる」ことは「認知ストラテジー」の一種とされている。尹 (前掲) は、中国在住の大学生を対象に、聴解ストラテジー使用の意識及びそのストラテジーの使用と聴解力の関係について調査を行い、「聞きとれたものをメモする」という認知ストラテジーの使用頻度が全体で3番目に高かったと報告している。このことから、メモをとることが、聴解の重要な方策であると学習者にも意識されていることがわかる。河内山 (1999) でも、「聞き手が聴解ストラテジーを意識しながら聴く方が、そうでない場合よりも高

い聴解効果をあげ」、「学力の高い学習者ほど、その傾向が強い」という。

本節では、以上の先行研究を踏まえて、聴解ストラテジーのうち、メモをとる際に用いる具体的なストラテジーに焦点をあてて論じることにする。今回収集したメモには主に6つのストラテジーが観察された。以下に例を挙げながらそれらのストラテジーを紹介する。

(1) 語の省略、記号や平仮名の使用

メモには、「光熱費」を「光」(N24①S1、N24②S10)、「減少」を「減」(N24①S5他)等のように、語の一部を意味が通じる程度に省略して、メモをとる時間を短くし労力を最小限に抑さえ、順次流れてくる言葉を捉える準備を行おうとする目的で用いられるストラテジーが多く見られた。また、「上昇」や「増加」を↑(N24①S2他)で、「加える」を「+」(N33②S9)で表す等の記号の使用も同様である。今回、メモにこれらの方策が見られたのは、学期の始めの授業で記号や略語を用いてメモをとる練習を行った成果でもあるのだろうか。

さらに、「授業料」を「じゅぎょうりょう」(N24①S5)とする等、画数の多い漢字を避け、あえて平仮名で記入するのもこのストラテジーの1種である。

(2) 情報の一部の母語への変換

オックスフォード(前掲 P.48)では、学習言語を「母語に変換する」ことを補償ストラテジーの1つとして位置づけている。補償ストラテジーは、「学習者が外国語を理解したり、発話したりする際に、足りない知識を補うために使うもの」で、「特に、語彙不足を補う意図を持っている。」という。また、「上級学習者やネイティブ・スピーカーが時々理解するのに推測を使うように、話したり書いたりする上で一時的にその能力を発揮できなくなったときに」、この補償ストラテジーが使われると説明している。

今回のメモには、中国人日本語学習者のメモに中国語が、タイ人学習者のメモにはタイ語らしい文字が見られた。補償ストラテジーの概念を適用すると、彼らはメモをとる際に、それまで日本語で綴っていた語を、力不足から、一時的に母語での書きとりに切り替えたということになる。

また、このストラテジーは、聞きとった単語を、文字数や画数が少ない中国語の漢字に置き換えることにより時間を短縮するという目的で使用されたとも考えられないだろうか。実際、筆者が、他のニュースのメモの中で1語のみ母語で記した学習者に理由を聞いたところ、「日本語の単語も知っているが中国語の漢字のほうが画数が少ないので短時間で簡単にメモできるから用いた」と答えている。

さらに、後でメモを見直す際に、意味を明確にするために、受けとった情報を頭の中で母語に置き換え確認した後、日本語に変換せずにそのまま記録した可能性もある。以上のように、学習者が聞きとった情報の一部の母語への変換の記録については、目的が複数存在すると考えられる。

(3) 未知語の書きとり

今回のメモから、たとえ聞きとった直後に、音の塊の意味が理解できなくても、耳に入ってきた音を取りあえずメモするという方策が学習者によってとられたことがわかった。例えば、「数分の一」をメモしたと思われる、「すぶい」(N33②S4)、他に意味不明の「じょうかいも表

屋」(N33①S10)、「にねうほうさ」(N33①S17)等があった。これは、彼らが聞きとった際に、その場で意味処理ができなくても、後で全体を見直し未知語の意味を推測したり、後の内容質問への解答に備えたりする目的でとられた戦略と言えそうだ。

(4) 表現の置き換え

この戦略は、やや長めの、あるいは難解な表現を、短く、または易しく言い換えることにより、記録する時間を短縮したり後に行う意味処理を行いやすくしたりするためにとられた手段だと考えられる。たとえば、「生活費を切り詰める」を「節約しなきゃ」(N24②S3)、「持ち家の希望者が増えています」を「自分の家を持ちたい増」(N24②S5)等、聞きとった内容で用いられた表現をそのまま記すのではなく、自分が慣れている表現に置き換えるものが目立った。

(5) 情報の先取り

N36②S8のメモには、正しくは「20代が37%、4、50代が28%」を、「20~~99~~代37%、4、50代が__」と記されている。本人は、ニュースの流れから「20代、30代」と続くものと予測し、先に30とメモしたものの、実際はそうではなかったため、「30」を消去したのではないだろうか。予測を行いながら聞くというのは、聴解力がある学習者がしばしば選択すると思われる手段だが、次の語を先にメモしておこうとする積極的な姿勢が伺える。あるいは、後続する37%の十の位が聞こえてきて、それを先に綴ったが、前後の数字の単位が異なると認識し途中で消去した可能性も考えられる。

さらに、メモの最後の「__」の部分は、水田（前掲 p.54）が用いている、「重要だと思ったり未知あるいは不明確な語句や文を、記憶にとどめて後続テキストを聞き続ける」という「保留」に似ている。以上のように、このメモ内容から複数の戦略の使用が観察された。

(6) 自己モニター

オックスフォード（前掲 PP.115-116）では、「エラーをモニターする」「自己モニター」を一種のメタ認知戦略としている。そして、メタ認知戦略について、「学習者が自己の学習過程を調整する方法を提供してくれる活動である」と説明している。この戦略の使用は学習者にはあまり見られないようで、水田（前掲）でも、問題が起こったことを認識する「問題特定」から「自己モニター」と続く連鎖は、学習者にとって「使いにくい」戦略であると記されている。今回分析したメモにも1件しか見られなかった。そもそも、学習者がこの方策を用いているかどうかということは、認識されにくいのではないだろうか。

(5)で例を挙げた学習者は、自分が書いた語を見直して誤りに気づき、すぐに自ら訂正を行っている。自身が産出した言葉や表現が正しいかどうかを客観的に見直す機会を持つことは、目標言語の習熟度を高める有効な方策である。そうでなければ、アウトプットの正誤を意識しないために誤用が定着し、長期に渡れば化石化してしまう恐れがあるからである。聴解は読解や作文とは異なり、情報を音声で与えられた後、学習者が反応するまでの時間に制限があるため、限られた時間内に聞きとった内容の記録を残すことで精一杯の学習者にとって、短時

間でのモニターは容易ではない。しかし、このようなストラテジーも学習言語の習得を効率的に進める方策の1つだと学習者に提示し、その練習の機会を与えることも大切である。

以上、メモに表れたストラテジーの観察により、学習者が様々な方策をとりながら記録をとっていることがわかった。今回は6つのストラテジーが見られたが、メモのデータ数がさらに増えれば、その分抽出できるストラテジーもさらに増えると思われる。

5. まとめ

本稿では、日本語学習者のニュースにおけるメモ分析から、以下の3点が明らかになった。まず、誤用に関しては、播岡（前掲）による先行研究と同様3種類が観察され、その中でも今回対象としたメモには音素や音変化によるものが一番多く出現していた。その他、ニュースに出現した数字に関する誤用も見られた。これらは、聴解力の低い学生のメモに多かったが、聴解力が高いからと言って誤用が全くないとも言えなかった。

次に聴解力とメモの量はやや比例し、特に書きとったメモの中のキーワードの割合が、大きく関与していることがわかった。

最後にメモをとる上で学習者が使用するストラテジーを調べた結果、①語の省略、記号や平仮名の使用 ②情報の一部の母語への変換 ③未知語の書きとり ④表現の置き換え ⑤情報の先取り ⑥自己モニターが観察され、学習者は音声聞きとる際に複数の方策を用いていることが明らかになった。

V. おわりに

1. 聴解の授業への活用

本章では、IVで述べたメモの分析と考察から、学習者が効果的に聴解力をつけるための授業への活用を考える。

（1）要点をつかむ練習を行う。

音声を聞きながらメモをとる際に、情報として捉えた内容の全てをメモするわけにはいかないので、記録する語とそうでない語の判断が必要になってくる。水田（前掲）は、「自己モニター」と並んで「聞き流し」も学習者には見られず、使いにくいストラテジーであると言及している。聞き手が談話の中で何に注目し、何を重要度が低いと決定し聞き流すのか、その取捨選択の際には様々な判断の根拠がある。例えば、トピックが提示されることが多い始めの部分や頻繁に出現する語、それから、「すなわち」「つまり」等の言い換えを表す接続詞等に注意する等、工夫しながら情報を振り分ける練習が必要である。

今回、質問への解答で正答に結び付いていない学習者のメモを見て、1度に1つのトピック全ての内容を聞くのではなく、少しずつ情報を整理し確認しながら要点をつかむ練習を行う必要性を感じた。実際には、たとえば、前述した工夫をしながら要点を捉えるよう指示し、教師が談話を聞かせ、途中で音声を止め、学習者が要点を絞りこめているかどうかを確認したり部

分的に要旨をまとめてもらったりする練習が可能である。また、その根拠も共有するといいた
ろうし、その後自身で導いた解答が正しいかどうかを振り返る時間を設けるのもいいだろう。

(2) 学習者が不得意な音を含む語を正確に聞きとる練習を行う。

今回、特殊音節や濁音を正確に聞きとるのが苦手な学習者が複数見られたことから、聞きと
る段階での誤った音の受容を減少させるための訓練として、特殊音節や濁音を含むやや高度な
語を書きとらせたり、それらの語をキーワードとして含む談話を聞かせたりする練習を行う方
法もある。学習が進めば進むほど軽視されそうな、単語レベルでの聞きとりに重点をおいた練
習だが、上級になってもこの訓練は続けるべきである。1と同様に、聞きとりの後、解答を確
認する前に自分で正しいかどうかを判断させることも練習になる。

(3) 先を予測しながら聞く。

音声途中で止め、学習者にその先の展開を想像させたりその後の話の流れの可能性を考え
させたりすると、ニュースの続きが予測でき、その結果、聞く側の柔軟な音声の受容環境が整
い、後続する内容の円滑な理解につながると考えられる。また、話の全容が捉えやすいため、
必要な語彙の取捨選択も行いやすいのではないだろうか。

(4) 短時間でわかりやすいメモをとる技術を身につける。

聴解と並行して記録する作業を行うには、メモを素早くとる必要がある。その手段として、
自分が決めた省略語を用いたり、漢字がわからない場合は平仮名や自分がわかる言葉でメモし
たり、語と語や内容に関係づける記号を用いたりすることを学習者に示すと、メモをとる技術
が伝わる。今回の学習者のメモでは、省略語や記号が観察されたが、それらの種類は限られて
いた。一度、教師が様々な例を示すと、使用されるバリエーションが広がる可能性がある。山
崎（前掲）では、授業で同様の単語単位のメモとりの練習を行った後で、音声を聞かずに、1
文を読んでメモ書きする練習を行っている。これは、聴解から切り離して素材を記録に置き換
えることに重きを置いた訓練である。学習者が内容は聞きとれるが、メモとして上手に記録を
残せない場合は、このような技能に絞った練習も効果がありそうだ。

(5) 自己モニターを行う訓練の場を提供する。

横山（前掲）は、「『モニター』は、ほかのストラテジーをコントロールする最も重要なスト
ラテジー」であると述べている。(1)(2)でもこのストラテジーに触れたが、自分が聞きと
った内容は正しいか、メモに誤用がないか等、自身でモニターを行う機会を時々与えると、学
習者もこのストラテジーを意識するようになり、目標言語の習得が進むことが期待される。

以上の(1)～(5)以外にも、ただ漫然と音声を聞くのではなく、目的に合わせて様々な
ストラテジーを使い分けて聴解の練習を行うことや、既存の知識を活かして語と語の関係を考
え論理的に話の展開が捉えられるようにする練習も可能だろう。さらに、少人数のクラスな
ら、学習者がどの段階で躓いて問題の正答に結び付いていないのかを分析し、必要に応じて個
別指導を行うのも有効だと思われる。聴解の授業においてメモをとる練習と一言で言っても、
様々な方法がある。まずは、教師が改めてメモをとるための教材を検討し、効果的な聴解授業

の在り方について考えることが必要だろう。

2. 今後の課題

最後に今後の課題について触れる。

本研究では学習者がとったメモ分析を行ったが、データの数に限りがある。Ⅳの考察のところで述べたが、メモのサンプル数が多ければ、誤用や学習者が使用するストラテジーに関して、より詳細な分析と考察ができるだろう。

今後、長期的に学習者のメモを採集し、メモの出現数、その中に見られる誤用やメモの中に含まれるキーワードの現れ方、ストラテジーについて縦断的に観察することで、学習者の習得過程での変化も分析できるのではないかと考える。また、聴解の結果としてのメモだけでなく、学習者が記録として書き留めるまでの過程も調査する必要がある。

コンピュータの普及とインターネットの整備により、近年、海外にしながら言語学習ができる環境が充実してきた。しかし、日本で生活し、常に日本語に触れる環境にある日本語学習者は、海外で学ぶ学習者よりも、インプットの量ははるかに多いだろう。その聞きとった情報を選別し、たとえ未知語があっても既習の知識とストラテジーを用いて推測し、先の内容を予測することができるというのが、横山（前掲）の意味する「聞ける耳」である。その「耳」を養うことは学習者の聴解力の向上のみならず、総合的な日本語学習の促進にも寄与するのではないだろうか。

参考文献

- 尹松（2001）「聴解ストラテジー使用と聴解力との関係について—日本語を主専攻とする中国人大学生の意識調査の結果から—」『言語文化と日本語教育』第21号 お茶の水女子大学 日本文化学会研究 pp.58-69
- 犬飼康弘（2007）『聴解・発表ワークブック』スリーエーネットワーク
- オックスフォード、レベッカ L.（1994）『言語学習ストラテジー—外国語教師が知っておかなければならないこと—』（穴戸通庸・伴紀子訳）凡人社
- 河内山晶子（1999）「聴解ストラテジーの意識的使用による効果—学力差要因と、L1-L2転移要因を中心に—」『横浜国立大学留学生センター紀要』横浜国立大学留学生センター pp.26-37
- 遠藤裕子（1987）「大学生のための聴解 ニュース番組の特集を利用して」『日本語教育』64号 日本語教育学会 pp.109-121
- 播岡恵（2010）「メモ分類による聴解過程の可視化への試み—ニュースを使った初中級レベルの聴解授業—」『2010年度日本語教育学会秋季大会予稿集』日本語教育学会 pp.195-200
- 三井豊子・堀歌子・森松映子（1998）『ニュースで学ぶ日本語パートⅡ』凡人社
- 水田澄子（1996）「独話聞き取りにみられる問題処理のストラテジー」『世界の日本語教育』第6号 国際交流基金国際センター
- 宮城幸枝（1998）「初級からの聞き取りの指導—『初級聴解練習 毎日の聞きとり50』の開発

- をととして」『東海大学紀要留学生教育センター』第18号 東海大学 pp.27-38
- 山崎由喜代（2007）「『聴解作文』の授業報告—語彙リストとメモノートの働き—」『筑波大学留学生センター 日本語教育論集』第22号 筑波大学留学生センター pp.35-46
- 横山紀子（2008）『国際交流基金日本語教授法シリーズ5 聞くことを教える』ひつじ書房

参考資料 1

ニュース 36 派遣社員

2010.12.1 実施

I テープを聞く前にクラスで話し合ってみましょう

1. 「派遣社員」とは何ですか。

2. 皆さんの国では、どのような働き方がありますか。また、どのような問題がありますか。

II テープを聞いて、メモをとりましょう

III メモをもとに答えましょう

1. () に言葉を入れて、() は、どちらか選んでください。

去年の総登録者数	今年の総登録者数	登録者の伸び率
男性：(ア.) 人	(イ.) 人	ウ {高い/高くない}
女性：	エ 万人	オ {高い/高くない}

2. 男性の登録者数が増えた理由は何ですか。

- ア () 派遣社員の方が収入が多い。
 イ () 毎日、朝から晩まで会社にいなくてもよい。
 ウ () 自分にとってつまらない仕事はしなくてもよい。
 エ () 会社をやめた 60 歳以上の男性の希望者が増えた。
 オ () 会社をやめさせられた人が増え、仕事をさがしている。
 カ () 派遣社員のほうが楽しく仕事ができる。

3. 質問に答えましょう。

(1) 派遣社員は、男性も女性も、同じように増えてきたのですか。

(2) 企業は、派遣社員について、どう考えていますか。

IV ニュースの内容を要約しましょう

V ディクテーション

- ① _____
- ② _____
- ③ _____
- ④ _____
- ⑤ _____
- ⑥ _____

II テープを聞いて、メモをとみましょう

2月増収 (生) → 83.7300
 増収 (2) 金増. 1.855 873. 4567増
 増収 増収
 1011-9

メモ

8割社宅 2DK 132千 1110円
 3 15
 持ち家 18

II テープを聞いて、メモをとみましょう

132千増. 873千
 増. 20% 26370%
 増. 145千. 872千
 増. 145千. 872千
 増. 145千. 872千